顎下部脂肪腫の2例

久保倉弘孝・長田道哉・石川好美・遠藤盛孝
林 誠一・大村 進・増田元三郎・藤田 浄秀

Two cases of lipoma in submandibular space

Hiroataka KUBOKURA・Michiya OSADA・Yoshimi ISHIKAWA・Moritaka ENDO
Seiichi HAYASHI・Susumu OHMURA・Genzaburo MASUDA・Kiyohide FUJITA

Abstract: Lipoma in submandibular space is considered relatively rare.

Authors reported two cases of submandibular space lipoma noted in 37 year-old male and 34 year-old female with special emphasis to diagnostic significance of CTscan.

CT number showed about -100 Hounsfield units in submandibular mass that was characteristic of lipoma.

Key words: lipoma, CTscan, tumor in submandibular space

結 言

脂肪腫は、非上皮性の良性腫瘍で、脂肪組織の存在するすべての部位に発生するが、口腔外科領域においては、顎下部の脂肪腫の報告は少ない。

最近、われわれは顎下部に発生した脂肪腫の2例を経験したので、その概要を報告する。

症 例

症例1

患 者：37歳 男性。

初 診：昭和57年10月■日。

主 訴：右側顎下部の腫脹。

既往歴：特記事項なし。

家族歴：特記事項なし。

現病歴：昭和56年夏頃より、右側顎下部の拇指頭大の腫瘍に気がつくも、自発痛および圧痛を認めないために放置していた。その後腫瘍は漸次増大傾向を認めたために、昭和57年7月、某歯科を受診し、当科を紹介され来院した。

写真1 症例1術前顔貌所見

現 症

全身所見：体格、栄養ともに中等度で、そのほか特記事項は認められなかった。

口腔外所見：右側顎下部に、弾性軟、可動性のある境界比較的明瞭な鶏卵大の腫瘍を認めた。表面皮膚は健康皮膚色を呈し、圧痛はなかった（写真1）。局所リンパ節は、左側顎下部に、小豆大1個、可動性、無痛性のリンパ節を触れた以外、オトガイ下、頸部などには触知しなかった。

横浜市立大学医学部口腔外科学教室

（主任：藤田浄秀教授）

Department of Oral Surgery, School of Medicine,
Yokohama City University (Chief: Prof. Kiyohide
Fujita)

受付日：昭和59年3月26日

写真2 症例1 右側顎下腺唾影像
A: PA (正面像) B: 下顎骨斜位

口腔内所見: 口腔内より腫瘍は触知せず, 右側耳下腺乳頭および舌下小丘部に病的変化はなく, 唾液分泌は良好であった。

単純X線写真所見: 腫瘍に相当する部分には特別な所見は認められなかった。

唾液腺造影所見: 右側耳下腺唾影像に病的変化は認められなかった。右側顎下腺唾影像では, 表層, 前縁および後縁に圧排像が認められた (写真2)。

CT 所見: 腫瘍に相当する水平断層像では, 咬筋の外側および右側下顎骨体の下方から, 胸鎖乳突筋前縁にかけて 50×20 mm の大きさの腫瘍が認められた。内部は low density で均一, 辺縁整で境界明瞭であった。CT 値は平均すると -87 Hounsfield units (以下 Hu) であった (写真3)。

超音波断層所見: 辺縁エコーは一部不明瞭な部分があるが, 内部エコーは均一な高エコー像を有する充実像を呈していた。

臨床検査所見: 血液ならびに尿検査に異常はみられなかった。

臨床診断: 脂肪腫。

処置および経過: 昭和57年12月■日, GOE 全身麻酔下に腫瘍摘出手術を施行した。切開線は, 右側顎下部に皮膚切開を行い, 皮下組織を鈍的に剝離すると, 深頸筋膜浅葉直下に鶏卵大, 黄色, 弾性軟の腫瘍を認めた。腫瘍は顎角部を中心にして, 上方外側は咬筋に接し, 下方は下顎骨を横ざり顎下腺を圧迫していたが, 薄い被膜で完全に被包されており周囲組織より容易に剝離摘出することができた (写真4)。術後の経過は良好で, 現在ま

写真3 症例1 CT 所見

で再発はない。

摘出物所見: 摘出物は, $45 \times 50 \times 30$ mm で黄色, 弾性軟の被膜を有する腫瘍で, その断面は淡黄色で充実性の脂肪様組織で満たされ, 分葉構造を示していた (写真5)。

病理組織学的所見: H-E 染色では腫瘍は成熟した脂肪細胞の増殖よりなり, それらの間に菲薄な結合組織線維が認められた。脂肪細胞に異型性は認められなかった (写真6)。

病理組織学的診断: 脂肪腫。

症例2

患者: 34歳 女性。

写真 4 症例 1 手術所見

写真 6 症例 1 病理組織像 (H-E 染色)

写真 5 症例 1 摘出物

写真 7 症例 2 術前顔貌所見

初 診：昭和58年4月■。

主 訴：右側顎角部の腫脹。

既往歴：特記事項なし。

家族歴：特記事項なし。

現病歴：昭和54年頃より、右側顎下部下方の小腫瘍に気がつくも、自発痛および圧痛を認めないために放置していた。その後、腫瘍は漸次増大傾向を認め、来院1年前より急激に増大したように感じたために、昭和58年1月、某歯科を受診し当科を紹介され来院した。

現 症

全身所見：体格、栄養ともに良好で、そのほか特記事項は認められなかった。

口腔外所見：右側顎下部に、弾性軟、可動性のある境界比較的明瞭な鶏卵大の腫瘍を認めた。表面皮膚は健康皮膚色を呈し、圧痛はなかった(写真7)。局所リンパ

節は、左右顎下部に、小豆大1個、可動性、無痛性のリンパ節を触れた以外、オトガイ下、頸部などには触知しなかった。

口腔内所見：口腔内より腫瘍は罰知せず、右側耳下腺乳頭および、舌下小丘部に病的変化はなく、唾液分泌は良好であった。

単純X線写真所見：腫瘍に相当する部分に特別な所見は認められなかった。

唾液腺造影所見：右側耳下腺唾影像、右側顎下腺唾影像に病的変化は認められなかった。

CT 所見：腫瘍に相当する水平断層像では右側顎角部後縁から、内方へは傍咽頭間隙に及ぶ low density で均一、辺縁整で境界明瞭な腫瘍を認めた。CT 値は平均すると-95 Hu であった(写真8)。

超音波断層所見：辺縁エコーは一部不明瞭な部分があ

写真 8 症例2 CT 所見

写真 10 症例2 摘出物

写真 9 症例2手術所見
顔面神経下顎縁枝にテープをかけてある。

写真 11 症例2病理組織像 (H-E 染色)

るが、内部エコーは均一な高エコーをもつ充実像を呈していた。

臨床検査所見：血液ならびに尿検査に異常はみられなかった。

臨床診断：脂肪腫。

処置および経過：昭和58年7月■日、GOF 全身麻酔下に腫瘍摘出手術を施行した。切開線は、右側顎下部に皮膚切開を行い、皮下組織を鈍的に剝離すると、深頸筋膜浅葉直下に黄色弾性軟の腫瘍を認めた。腫瘍の前方は顎下腺後縁、後方は耳下腺下極および、上方の一部は、下顎角内面に存在していた。周囲組織とは比較容易に剝離できたが、一部深頸筋膜浅葉との癒着がみられる部分があった(写真9)。術後の経過は良好で、現在まで再

発はない。

摘出物所見：摘出物は、 $55 \times 35 \times 25$ mm で黄色、弾性軟、結節状の被膜を有する腫瘍で、その割面は淡黄色で充実性の脂肪様組織で満たされ、分葉構造を示していた(写真10)。

病理組織学的所見：H-E 染色では腫瘍は成熟した脂肪細胞の増殖よりなり、それらの間に菲薄な結合組織線維が認められた。脂肪細胞に異型性は認められなかった(写真11)。

考 按

脂肪腫は口腔外科領域においては、比較的まれな良性腫瘍であるとされ、諸家の報告^{1~11)}を総合すると、病理組織学的検索を行った5,022例の良性腫瘍のうち、脂肪腫は74例(1.47%)にすぎなかった。当科においても、1978~1982年の5年間における病理組織学的検索を行った246例の非歯源性良性腫瘍のうち、脂肪腫は7例(2.8%)であった(表1)。口腔外科領域における脂肪腫の発生部位は、MacGregor ら¹²⁾、Hatziotis¹³⁾、金田ら¹⁴⁾によると、頬粘膜、舌、口底の順に多く認められた

表 1 横浜市立大学医学部口腔外科学教室における脂肪腫の症例 (1978~1982)

年 度	非歯源性 良性腫瘍件数	脂 肪 腫					
		件 数	症 例	年 齢	性 別	部 位	大 き さ
1978	47	1	1	75	女	左頰部	小指頭大
1979	42	2	2	37	女	76 歯肉	大豆大
			3	70	女	頰粘膜	小指頭大
1980	46	1	4	32	女	オトガイ下部	拇指頭大
1981	52	0					
1982	59	3	5	66	男	16 歯肉	大豆大
			6	51	男	右頰部	拇指頭大
			7*	37	男	右顎下部	鶏卵大

(*症例 7 は本文中の症例 1 に相当)

表 2 本邦における顎下部脂肪腫の報告

症例	報告者	年代	年齢	性	発生部位	大きさ	診断方法	臨床診断	病理診断
1	大井, 他	1962	17	女	口腔底~右側顎下部		視診, 触診等	皮膚様囊胞	Lipoma
2	荻原, 他	1968	58	女	右側顎下部	7×5×5 cm	同上	顎下部良性腫瘍	脂肪腫
3	中村, 他	1970	63	女	右側舌下部~ 右側顎下部	5×3×1.5 cm	同上	皮膚様囊胞	脂肪腫
4	橋本, 他	1977	55	女	口腔底~右側顎下部	52×74×40 mm	同上		単純性脂肪腫
5	郡家, 他	1979	55	男	左側顎角部~顎部		同上		真性脂肪腫
6	田中, 他	1980	45	男	左側顎下部	拇指頭大	同上		脂肪腫
7	上橋, 他	1981	36	男	右側顎下部	6×6×3 cm	同上	右顎下部腫瘍	脂肪腫

と述べており、顎下部には比較的まれのようなのである。口腔外科領域の脂肪腫のうち顎下部の占める割合は、金田ら¹⁴⁾によれば8.2%、関田ら¹⁵⁾によると11.5%であったと報告している。本邦において顎下部に発生した脂肪腫の報告は、われわれの調べた範囲では、大井ら¹⁶⁾、荻原ら¹⁷⁾、中村ら¹⁸⁾、橋本ら³⁾、群家ら¹⁹⁾、田中ら⁸⁾、上橋ら²⁰⁾の7例が散見されるにすぎない(表2)。しかし、全身的にみれば、脂肪腫は脂肪組織の存在するあらゆる部位に発生する頻度の高い腫瘍である^{21,22)}。Ashley²³⁾はDavid Lewis Northern Hospitalにおける249例の身体各部に発生した脂肪腫のうち顎部が最も多かったとし、Anderson²¹⁾やShafer²⁴⁾も同様に顎部は好発部位であると述べている。顎下部は顎部および口腔の境界領域であり、解剖学的にどのように位置づけるかにより、発生頻度の統計は異なるのであるとも考えられる。すなわち、Anderson²¹⁾、Ashley²³⁾、Shafer²⁴⁾の顎部の脂肪腫の統計に顎下部が含まれているとすれば、顎下部脂肪腫の頻度は現在考えられるよりも高いと思われるが、この点は文献的に明らかでない。

口腔外科領域の脂肪腫は中高年者に好発し、MacGre-

gorら¹²⁾によると50歳代に最も多くみられ、Hatziotis¹³⁾は124例中80%のものが40歳以上であったとしている。本邦においては、60歳代、50歳代に好発していると中村ら¹⁰⁾は報告している。当教室においては、30歳代3例、70歳代2例、50歳代1例、60歳代1例であった(表1)。

口腔外科領域の脂肪腫の性別は、外国例では、男性に多いとするもの^{12,13)}女性に多いとするもの²⁵⁾、性差がないとするもの²⁶⁾などさまざまな報告がある。本邦においては、中村ら¹⁰⁾によると男性46例(45%)、女性57例(55%)と女性にやや多く認めるとし、金田ら¹⁴⁾によると男性65例(48.5%)、女性69例(51.5%)であり、この場合はば性差はないと考えられる。本邦における顎下部の脂肪腫に関しては本症例を含めて、男性6例、女性5例であった(表2)。

本腫瘍の診断に関しては、CT所見が特異的で、きわめて有用である。前述の顎下部の報告^{3,6,18-20)}においては、触診や単純X線所見等による診断が主であり、囊胞性疾患やその他の良性腫瘍との鑑別診断が困難であったとされ、術前に脂肪腫と診断し得た症例は認められなかった(表2)。高橋ら²⁷⁾も術前診断が困難であった顎部の

脂肪腫を経験したと報告している。脂肪腫のCT所見の特徴は、そのX線吸収率を示すとされる特異的なCT値にある。CT値の1つとして用いられるHuは、X線吸収率を、水が0、骨が+1000、空気を-1000としており^{28,29)}、これによれば液状の物質や軟組織はプラスの値を多くとり、マイナスの値をとるのは主に空気か脂肪であり、脂肪はおおよそ-100Huを示すとしている。脂肪腫においても同様であり、Bradačら³⁰⁾はおおよそ-100Huを示すとしている。本症例においても、症例1では平均-87Hu、症例2では平均-95Huを示したため、CT所見により術前に脂肪腫であると診断することができた。Obwegeserら³¹⁾、Lewisら³²⁾、Millerら³³⁾、Polteら³⁴⁾により顎骨内に発生した脂肪腫が報告されているが、生検を行った症例を除いては、術前の診断として、エナメル上皮腫や歯原性の嚢胞を疑っている。このように顎骨内のごとく触診が行いにくい場合では、CTは一層有用な検査方法と思われる。また、脂肪腫の診断に際してCTは、その存在のみならず腫瘍の広がりも推定することができる。本症例においても下顎骨との関係は明確に把握でき、手術に際しての神経、血管との位置関係も、術前に予測することが可能で、大変有用であると思われた。

結 語

われわれは、37歳男性および34歳女性の右側顎下部に発生した脂肪腫を経験し、診断に際してCTが有用と思われたので、若干の考按を加えて報告した。

引 用 文 献

- 1) 朱雀直道, 亀山忠光, 他: 粘膜下に発生した脂肪腫の2症例. 口科誌 16: 499-504 1967.
- 2) 柴田重雄, 出口敏雄, 他: 口底部 Fibro lipoma の1例. 口科誌 19: 737-740 1970.
- 3) 橋本賢二, 武田義豊, 他: 口腔底脂肪腫の1例. 日口外誌 23: 837-841 1977.
- 4) 久野吉雄, 佐藤田鶴子, 他: 頬粘膜に発生した脂肪腫の1症例について. 歯学 67: 388-392 1978.
- 5) 岡野昌治, 成瀬 健, 他: 若年者の頬部に見られた粘液脂肪腫の1例. 日口外誌 25: 649-652 1979.
- 6) 田中大順, 山本悦秀, 他: 口腔領域に発生した脂肪腫8例の臨床的観察. 日口外誌 26: 1068-1073 1980.
- 7) 八重垣 健, 亀山忠光, 他: 舌にみられた脂肪腫の1例. 日口外誌 26: 1563-1567 1980.
- 8) 鶴野一洋, 堂原義美, 他: 軟口蓋鼻咽腔部に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 27: 1052-1055 1981.
- 9) 伊藤信明, 岡村 悟, 他: 乳児の頬部に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 28: 739-744 1982.
- 10) 中村 繁, 堂原義美, 他: 上唇部に発生した巨大な脂肪腫の1例. 口科誌 31: 438-444 1982.
- 11) 千葉博茂, 葛井 正, 他: オトガイ下部に発生した脂肪腫の1症例. 口科誌 31: 102-107 1982.
- 12) MacGregor, A.J. and Dyson, D.P.: Oral lipoma; A review of the literature and report of twelve new cases. Oral Surg 21: 770-777 1966.
- 13) Hatziotis, J. Ch.: Lipoma of the oral cavity. Oral Surg 31: 511-524 1971.
- 14) 金田式世, 岩見弘司, 他: 脂肪腫の2例と文献的考察. 日口外誌 29: 1584-1590 1983.
- 15) 関田俊介, 丸谷雅晴, 他: 脂肪腫の2例. 鶴見歯学 2: 69-74 1976.
- 16) 大井一正, 千葉英輔: 口腔底に発生した巨大なLipomaの1例(抄). 口外誌 8: 220 1962.
- 17) 荻原 力, 川崎健治, 他: 舌下部及び顎下部にみられた脂肪腫と皮様嚢胞. 日口外誌 14: 145-148 1968.
- 18) 中村保夫, 荻野益男, 他: 口腔底にみられた脂肪腫の1例(抄). 日口外誌 16: 245 1970.
- 19) 郡家常雄, 伊藤輝夫, 他: 顎下部にみられた脂肪腫の1例(抄). 日口外誌 25: 956 1979.
- 20) 上橋陸海, 平賀三嗣: 顎下部に発生した脂肪腫の一例(抄). 口科誌 30: 357 1981.
- 21) Anderson, W.A.D.: Pathology I. 5th Ed, Mosby Co, Saint Louis, 1966, p 438-440.
- 22) Ackerman, L.V. and Butcher, Jr. H.R.: Surgical pathology. 4th Ed, Mosby Co, Saint Louis, 1968, p 892-894.
- 23) Ashley, D.J.B.: Evans' Histological appearances of tumours. 3rd Ed, Churchill Livingstone, Edinburgh London and New York, 1978, p 54-57.
- 24) Shafer, W.G., Hine, M.K., et al.: A textbook of oral pathology. 2nd Ed, W.B. Saunders Company, Philadelphia and London, 1963, p 125-126.
- 25) Seldin, H.M., Seldin, S.D., et al.: Lipoma of the oral cavity: report of 26 cases. J Oral Surg 25: 270-274, 1967.
- 26) Simpson, H.E.: Lipoma of oral cavity. Oral Surg 12: 349-532 1959.
- 27) 高橋光明, 海野徳二, 他: 術前診断が困難であった顎部脂肪腫の一例(抄). 日耳鼻 82: 425 1979.
- 28) 永井輝夫編集: 画像医学講座[I]. 第1版, 朝倉書店, 東京, 1982, 3-5頁.
- 29) Dixon, A.K.: Body ct a handbook. 1st Ed, Churchill Livingstone, Edinburgh London Melbourne and New York, 1983, p 1-7.
- 30) Bradač, G.B. and Büll, U.: Computed tomography in intracranial tumors. 1st Ed, Springer-Verlag, Berlin Heidelberg New York,

- 1982, p 311-312.
- 31) Obwegeser, H.L. and Makek, M.S.: Benign lipoblastoma in the mandible. Head Neck Surg 5: 251-256 1983.
- 32) Lewis, D.M., Brannon, R.B., et al.: Intraosseous angiolipoma of the mandible. Oral Surg 50: 156-159 1980.
- 33) Miller, W.B., Ausich, J.E., et al.: Mandibular intraosseous lipoma. J max-fac Surg 40: 594-596 1982.
- 34) Polte, H.W., Kolodny, S.C., et al.: Intraosseous angiolipoma of the mandible. Oral Surg 41: 637-642 1976.
-